

## <随想>メディアと幻想：現代の「家庭小説」に思う

著者	岡野 幸江
雑誌名	日本文学誌要
巻	60
ページ	116-117
発行年	1999-07-10
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/00020079">http://hdl.handle.net/10114/00020079</a>

## メディアと幻想

——現代の「家庭小説」に思う——

岡野 幸江

最近、明治の家庭小説を研究する機会を得、この小説群が明治三〇年代に流行し、日本の近代国家の基礎となる家と、それを支えるための理想の女性像を流布していったことを改めて考えさせられたが、今、テレビでホームドラマや大河ドラマを見ていると、現代のまさに「家庭小説」だと思わざるをえない。

昨秋から今春まで放映されていた、NHK朝の連続テレビ小説「やんちゃくれ」などもそうである。このドラマは近年の女性の社会的活躍を反映して、女性たちの力が前面に出されていた。たとえばヒロイン渚は、高校中退、新聞社の雑用係から記者へと転身し、オリンピック選手候補と結婚するが、すぐに離婚、ジャーナリストとして自立し、大企業の不正を暴いていく。やがて自分を一人前のジャーナリストに育ててくれた先輩と再婚したものの、相手がカンボジアへ取材に行き事故で亡くなっ

てしまい、渚は一人で子供を産み育てていく。姉も講師として自立するなど、実に女性たちはパワフルだ。反対に男性たちは不甲斐ない。たとえば、父はいるがどうもはつきりしない父親で、不況のあおりで倒産した造船所の再開を必死で求め続けたのは、二人の姉妹と従業員たちであった。まさに現代は女の時代だと思わせる。

しかし、アップ・テンポでコミカルなこうしたドラマは、朝のドラマとしては好感がもてるが、ここには今日の時代が求める物語がしつかり織り込まれているのも確かだ。学歴など関係ない、家族は暖かく大切なもの、たとえば父はなくても子供は産み、知恵と創意で不況を乗り越切れ、等々。ちなみに、大河ドラマ「元祿繚乱」も、企業倒産にあった社員たちの物語として作られているという。家族の再建、不況の克服は、今日の最大のテーマになっているのである。

数年前、岩波ホールで上映された「アントニア」という映画を思い出す。この映画は、マルレーン・ゴリス監督によるオランダ・ベルギー・イギリスの合作であり、女四代にわたる命の営みを描いたものだった。

かつて古い因習の残る村から出ていったアントニアは、第二次大戦後、娘のダニエルを連れ、母の臨終に立ち会うため村に戻った。彼女は母の葬儀をすますとその村で土を耕し生活を始めるが、口さがない村の人々は二人のことをあれこれと言いつける。やがて男は要らないが子供が欲しくなったダニエルは、一度だけ町の青年と交渉を持って妊娠し、娘を産む。ダニエルの娘テレーズは神童で、やがて数学者で作曲家となる。そして

いつしかアントニアの回りには、近隣の農家ダーン家の、ピツテとヤン兄弟にレイプされ続けていた妹ディディや「ウスノロ」と呼ばれている作男をはじめ、村のたくさんの人々が集まってきて、さながらアントニアを中心とした大家族のようになっていくのである。この映画は、アントニアを中心とした女たちの生命を育む力や自然の営みの大いさを通して、現代の文明や文化を痛烈に批評している。つまりこれまでの男性中心の家父長制社会が抱え込んでいる暴力や差別などが可視化され、教育や宗教といった文化の内実が問われているのである。その意味でこのドラマは、現代の寓話とでもいうべきかもしれない。

家父長制の暴力はダーン家の男たちに象徴されている。作男や家畜を酷使する父、妹をレイプする兄弟たち。しかし、彼らはやがてそれぞれの形で自滅する。アントニア母娘を擲擧していた家長ダーンは事故死し、兄ピツテは彼を厄介者に思っていた弟ヤンに殺され、その後家督を継いだヤンも酷使した牛に蹴られて死んでしまうのである。一方、アントニアやダニエルを「罪深き者」と非難した神父にしても、懺悔する少女に淫らな行為をしていることが暴かれる。またテレーズが数学と作曲の才能を伸ばしたのは、学校ではなく村では変人とされる人物によってなのである。つまり村で守られてきた秩序や規範が、いかに虚偽に満ちまた滑稽であるのか、そうした秩序や規範から逸脱したアントニアという存在によって、浮き彫りにされているのである。

そしてアントニアの家に集まったのは、男から暴力を受けていた女、障害者、同性愛者、未婚の母など、いわばマイノリテ

ィなのである。それは穏やかで平和的な人々の集まりであり、血縁を越える共同体でもある。そして未来はいわばこうした周縁の人々が大地に根ざしながら生きることと切り開かれていくことが暗示されているのである。現代の文明や文化への痛烈な批評を含みながら未来をも切り取って見せるこうしたドラマは、日本ではあまりみられないのではないだろうか。もちろん映画とテレビドラマではメディアの性格が違う以上、映画の持つている厳しい批評性を、そもそもテレビドラマに期待することが無理だろうが、最近のテレビドラマを見ているとむしろ露骨な意図をさえ感じる。

たとえば先の「やんちゃくれ」にしても、その深層は企業活力の復活と家族再建、出産奨励の物語であり、いわば家父長制を基礎に発展を遂げた近代産業社会の神話の再編なのである。また「アントニア」が男性の暴力のおぞましさを描いているのに対し、たとえば大河ドラマ「元祿繚乱」ではこの男性集団の暴力は、仇討ちとして美化されるのである。私たちは、毎日毎日、こうしたメディアを通して無意識に自分たちの心性を作り上げられていくのである。そして繰り返される物語によって、それが自前の思いだと幻想する。だとするなら批評とは、そのあたり前のように流通している幻想を、容赦なく引きはがしてみせることにこそその役割があるのではないだろうか。そういう意味で、私たち自身の無意識や感性を揺さぶる批評が必要であると思うが、それを担っているのがフェミニズム批評やジェンダー批評なのだと思う。

(おかの ゆきえ・一九八九年博士課程修了)